

筑波大学審査学位論文（博士）

戦後初期における移動図書館の成立と展開に関する研究
— 図書館を媒介に地域とつながる図書館の理念に着目して —

筑波大学大学院 人間総合科学研究科
博士後期課程 教育基礎学専攻
(生涯学習・社会教育学)

石川 敬史

戦後初期における移動図書館の成立と展開に関する研究
— 図書を媒介に地域とつながる図書館の理念に着目して —

石川 敬史

1. 本研究の目的と対象

本研究の目的は、日本の移動図書館の始点である 1940 年代後半から 1950 年代を中心に、図書を媒介に地域とつながる図書館の理念に着目しながら、各地の図書館で移動図書館が成立した経緯や活動内容を明らかにすることにより、戦後日本の移動図書館の成立と展開を解明することである。

移動図書館とは、図書館の利用が困難な人々に対して、何らかの移動手段によって図書館資料を運び、図書館員によって行われる図書館活動である。最も代表的な移動手段は、トラックやバスを改造し、開架式書架や放送設備を搭載した特種用途自動車としての図書館車である。移動図書館には積載冊数や巡回周期に制約がある一方で機動性を有しているため(葉袋, 1984)、過疎地域や高齢者施設など図書館サービスが十分に及んでいない人々を視野に入れたアウトリーチサービスとして、地域に暮らす全ての人々を対象に図書館資料や図書館活動を届けることができる可能性を有している。かつて全国の図書館の運営指針となった『市民の図書館』(日本図書館協会, 1970)においても、移動図書館は図書館ネットワークの「水道の蛇口」であり、「図書館サービスの伸展の契機」として積極的に評価された。しかし近年の移動図書館は、定期巡回と貸出という定型的な活動に終始する傾向にあると同時に、遠隔地を対象にした巡回や図書館を建設するまでの代替として役割が固定化される傾向にある。

本研究において移動図書館という用語を用いる理由は、図書を運ぶ手段として移動図書館を捉えるのではなく、図書館の「移動」に着目することにある。移動図書館は図書館資料や図書館活動、図書館員を地域へ移動することができ、巡回する地域にステーションという単位が形成され、移動図書館の巡回先や活動方法には地域に対する図書館の理念との関わりがあるといえる。自動車という移動手段による移動図書館の成立が各地で相次いだ 1940 年代から 1950 年代を対象に、図書を媒介に地域とつながる図書館の理念に着目しながら移動図書館が成立した経緯をはじめ当時の活動内容を明らかにすることによって、移動図書館にいかなる役割が期待されて成立し、どのような活動へ展開したのかを検討することができる。

2. 本研究の課題

戦後初期の移動図書館に対しては、「戦後の旗手」(鈴木・石井, 1967)などと評されたが、総じて経験的な実践報告に留まる傾向にある。とりわけ、1950 年代に主に県立図書館によって広域

的な巡回を担った移動図書館は積極的に言及されたが、1960年代後半以降、きめ細かい巡回が可能で市立図書館による移動図書館の台頭によって批判的に評価されるようになった(源, 1970)。他方で歴史的に検討された研究については乏しく、執筆当時の問題意識から移動図書館を検討した研究(永末, 1991)(萩原, 2000)のほか、アメリカの館外サービスを通史的視点から検討した研究(中山, 2011)があるが、戦後初期の移動図書館の成立については千葉県立中央図書館の「訪問図書館ひかり」(以下、「ひかり号」とする)を対象とした研究(日本図書館研究会オーラルヒストリー研究グループ, 2017)に留まっている。

本研究において、これまでに歴史的に十分検討されていなかった戦後日本の移動図書館の成立と展開を解明するにあたり、社会教育史研究と図書館史研究の先行研究を踏まえ、次の3点の研究課題を据える。第一に、移動図書館が成立した土壌を戦前と戦後の連続性から解明することである。具体的には、①巡回文庫・貸出文庫や中央図書館制度下の県立図書館の姿勢、②非施設・団体中心の教化事業を意味した「施設」概念が戦後の非施設である移動図書館にいかなる点において連続していたのかという点である。これまでに公民館を中心に営造物に対する連続性が検討されているが(末本・上野, 1986)、「施設」と非施設への連続性の検討は十分ではない。第二に、移動図書館の目的と活動内容を明らかにすることによって、図書を媒介に地域とつながる図書館の理念が、これらにいかん程度に体現されたのかを検討することである。1960年代後半に戦後日本の図書館を大きく変革した日野市立図書館の「ひまわり号」には、同館の運営方針が体現されていた(前川, 1988)。本研究が対象とする戦後初期は、図書館法が制定され、戦後復興をめざす図書館の転換期であるため、各地の図書館が移動図書館によって何を実現しようとしていたのかを解明することにもつながる。そのため第三に、地域の事情を踏まえた独自の移動図書館の活動方法に着目し、戦後初期の移動図書館の性格を検討することである。諸外国などからの外来的受容(渡辺, 2008)(阿部, 1983)によって移動図書館の成立を捉えるのではなく、各館において独自の移動図書館が成立する過程やその活動内容に地域に対する移動図書館の役割が内在していると考えられる。

3. 本研究の構成と方法

本研究では、これらの課題を次の3点の構成に区分して分析した。第一に、各地に大きな影響を与えた「ひかり号」の巡回開始以前の時期を対象に、戦後日本における移動図書館の成立過程を検討した(第1章, 第2章)。第二に、各地の図書館において独自の巡回方法によって成立した移動図書館を対象に、目的や活動内容を検討した(第3章, 第4章)。第三に、農山村を中心に広域的な巡回を担う県立図書館による移動図書館とは異なり、都市部においてきめ細かく巡回可能な移動図書館がいかなる性格を有していたのかを検討した(第5章)。

こうした検討にあたっては、社会教育法において「社会教育のための機関」として規定されている公立図書館による移動図書館が本研究の対象であり、その成立と展開を解明するため、図書館報や図書館要覧等に留まらず、社会教育や教育委員会に関する月報・要覧のほか、議会の速

記録や予算審議・申請資料、日誌や行政文書などの一次資料、当該地域の新聞記事や当時の回顧録など幅広い資料の収集・分析に努めた。なお、各章の構成は末尾の【資料 1】に記した。

4. 本論文の概要

第 1 章では、移動図書館という活動名称の形成過程について、①図書館統計、②辞典・用語集、③図書館学の書籍、④実際の移動図書館活動から検討した。移動図書館は 1920-1930 年代に海外の活動が紹介される中で貸出文庫の一つの方法として位置づけられていた。1950 年代に入ると「図書配給自動車」などと訳出された後、図書館法に規定された「自動車文庫」が用いられる傾向にあったが、自動車で運搬される貸出文庫を自動車文庫とする場合もあり、用語の定義が定まっていなかった。現在の移動図書館としての定義が自動車文庫に定着した時期は、『社会教育調査報告書』（文部省）が刊行された 1950 年代中頃であった。

また、1940 年代後半という早期に移動図書館を開始したとされる岩手県立図書館と鹿児島県立図書館の活動内容を精査すると、戦前からの貸出文庫が独自の方法によって持続されていたことがわかった。前者は主に児童を対象に童話会の活動も伴った林間図書館などの時限的な図書館活動の総称であり、後者は県内各郡の配本所へ自動車で運搬する貸出文庫を指していた。こうした活動の背景には、「地域の文化活動の基盤」（岩手県）、「図書館の遠心的運動」（鹿児島県）として図書館長が貸出文庫を重視したことにあった。両館による貸出文庫の拡大や県内全域に及ぶ配本網の構築には、図書を媒介にして県立図書館と各地域とを結びつけ、地域文化の振興を果たす目的があった。

続く第 2 章では、移動図書館の成立をさらに検討するため、「日本におけるブック・モビル第 1 号」（鈴木・石井、1967）と言及されている高知県立図書館の「自動車文庫」（1948 年 7 月開始）を対象に、戦前からの巡回文庫の活動を踏まえながら、成立の背景や目的を検討した。その結果、同館の「自動車文庫」とは、戦前からの巡回文庫を基盤とし、町村の建設を進める青年団の活動を媒介に戦後に引き継がれ、同館独自に成立した活動であった。具体的には、①巡回文庫による青年団への配本網の拡大、②図書館の設置や読書活動の組織化に対する青年団への出張指導、③館報に相次ぐアメリカの移動図書館の紹介や検討があった。したがって同館の「自動車文庫」とは、従来の巡回文庫を専用自動車で輸送する方式であり、青年を中心とした団体への貸出が行われた。「自動車文庫」を同館が直接担うことによって、かつての巡回文庫の遅配や配送便の不備に左右されることなく巡回を主導することができ、各地の青年団との結びつきも持続された。加えて、この「自動車文庫」は巡回文庫の輸送に留まらず、自動車に複数の座席も装備され指導者を運ぶことができた。

同館の「自動車文庫」は、青年団の基盤となる活動の一つとして町村の建設を進める青年らの中に入り込み、青年教育の役割も併せ持ちながら自発的な読書活動と町村図書館設置・充実の機運を広げ、町村の自治振興の担い手を育む使命を有していた。

以後、1950 年代に入ると各地の県立図書館において移動図書館が相次いで成立する。続く

第3章と4章では、各地に影響を及ぼした「千葉方式」と称する「ひかり号」の活動方法に追随することなく、独自の方法によって成立した移動図書館に焦点を当て、その成立過程や目的を検討した。

第3章では、1950年7月に巡回を開始した徳島県憲法記念館(以下、記念館とする)による「文化バス」を対象とした。記念館による「文化バス」は、年1回の巡回、1町村につき1日約2ヶ所という長時間にわたる停車、紙芝居や講演会などの文化活動を重視した特徴を有していた。こうした独自の活動の背景には、「文化バス」が自動車によって記念館の理念である新憲法を實踐する装置であったことに加え、記念館を拠点に県内の文化団体の組織化と育成を牽引し、県民による文化の創造と新しい民主社会を形成する文化的な運動体が記念館であるという館長・蒲池正夫の思想も内在していたことにあった。したがって、記念館や「文化バス」における図書館活動はその一部にすぎず、記念館で実施される多彩な文化活動が「文化バス」によってそのまま地域に運ばれていた。

とりわけ、記念館の焼失によって「文化バス」は記念館の生命線であり象徴としての存在へと組み替えられることになった。しかし、その後再建された記念館が図書館機能を重視することによって、「文化バス」は県内町村の配本所に対する効率的な配本網の確立と図書館設置を醸成するための手段へと変容することになった。

続く第4章では、1950年代に多くの県立図書館が移動図書館の巡回を開始した中で、公民館機能と図書館機能を併せもった移動公民館を巡回した富山県(1950年12月開始)と兵庫県(1951年7月開始)の活動を対象とし、県の社会教育課による移動公民館が成立した過程や目的のほか、公民館機能と図書館機能をいかに両立しながら、どのような役割を担っていたのかを検討した。その結果、両館の移動公民館は、ナトコ映写機の巡回を媒介に戦前期からの巡回文庫を引き継ぎ、施設の拡充(富山県:公民館、兵庫県:総合文化会館)に伴いながら成立したことが明らかになった。共通するのは、両県ともに当初は移動図書館として企図されていたことであった。富山県では町村立図書館の設置拡充と県内図書館網の構築が、兵庫県では戦前からの巡回文庫のさらなる拡充が期待された。農山村部を優先的に巡回した両県の移動公民館は、開架式書架を装備し図書を積載するとともに、「文化の缶詰」と評されたように多彩な文化活動を地域に運んだ。

その一方で、移動公民館が多様な機能を背負い続けたことは同時に、その役割を焦点化できなかった側面も意味した。富山県では県立図書館との関わりが薄れ、移動公民館は図書館関係者から批判的に言及されたほか、兵庫県では移動公民館と称したまま県立図書館の分館的性格を有していた。すなわち、公民館機能と図書館機能を併せ持った非施設としての移動公民館の巡回を通して、県の社会教育課や県立図書館が市町村に果たす役割も明確ではなかった。結果的に両県の移動公民館は、家庭文庫(富山県)や読書グループ(兵庫県)の育成を担うこととなり、移動図書館と改称されることになった。

ここまで本研究で対象とした移動図書館とは、農山村を中心に広域的な巡回を担う県立図書

館による移動図書館であった。青年団など地縁的な地域共同体を基盤に生活と生産とが相互に深い関係にある農山村とは異なり、工場や会社への勤務を背景とした転入・人口増のほか、社宅や福利厚生など会社単位に労働社会が形成される都市特有の環境下において、移動図書館はいかなる目的によって成立し、展開したのであろうか。

第5章では福岡県八幡市(現・北九州市)における八幡市立図書館の「自動車文庫」(1952年8月開始)と八幡製鉄所図書館の「自動車文庫」(1951年12月開始)が、八幡製鉄所の企業城下町として都市特有の環境下において、いかなる目的と性格を有していたのかを検討した。その結果、八幡市立図書館による「自動車文庫」は、市内に点在する社宅や事業所など個々の労働社会に入り込み、住民が生活する場へきめ細かく巡回していた。他方、八幡製鉄所図書館の「自動車文庫」は、大規模社宅の従業員とその家族を対象に福利厚生としての目的を有し、同所の福利厚生の手厚さも体现していた。両館の移動図書館は、相互の関連を十分にみることができなかったが、結果として市内全域に図書館網を形成し、工業都市の発展を支える八幡市民に対して文化的な環境を醸成する役割を果たした。

その一方で、両館の移動図書館は限界を有していた。第一に、日雇職夫など住民登録のない者の利用ができず、加えて市内に数多く居住する子どもの利用も十分ではなかった。第二に、急増する住民や従業員に対する過渡的な条件整備を経て成立したため、移動図書館が図書を届ける手段に終始し、図書館の理念や目的との関わりから移動図書館が十分に問われなかった。第三に、個人への図書の貸出に終始し、地域組織や団体などとの結びつきを十分に形成できなかったことである。

こうした「自動車文庫」とは異なり、移動児童館の展開や児童文化運動とその担い手(「八幡児童文化会」や「八幡製鉄所童話研究会」)の存在を背景に、子ども会や婦人会など既存の地域組織を基盤として組織された「八幡市子ども文庫の会」による移動児童館の巡回文庫が市内全域の子どもたちへ組織的に図書を届けていた。結果的に児童文化運動や巡回文庫の展開は、両館の「自動車文庫」を補完する役割を果たしていたといえる。八幡市における移動図書館は児童文化運動の展開と結びつく素地を持つ活動であったとともに、地域組織を基盤に子どもを対象とした移動児童館による巡回文庫は図書館拡張のあり方や方法に対し再考を迫る活動であった。

終章では、これまでの知見を踏まえながら、先述した本研究の3点の課題(戦前と戦後との連絡性、移動図書館の目的と活動内容、移動図書館の性格)に沿って考察し、次の点を明らかにした。

第一に、戦後初期に成立した移動図書館は、戦前からの貸出文庫・巡回文庫に自律可能な自動車(M.フェザーストーンほか、2010)という移動手段が合流することによって県立図書館の主導性が強化されたことである。移動図書館は、距離の範囲においても、図書館活動の範囲においても拡張し続ける可能性を有していた。地域への直結性と拡張可能性を有する移動図書館によって、市町村に対する図書館網の形成と図書館活動に対する影響力を持続することができた。

同時に、行政機関によって立案され成立した当時の移動図書館は、郷土の振興や地域社会の

再編成を担う性格も併せ持っていた。青年団など戦前から続く地域組織を受入の基盤として引き継ぎながら、図書の配本・貸出に留まらず、青年団への指導や読書グループの組織化のほか、映画会や講演会、演芸会の開催など地域文化の振興に資する多彩な文化活動が移動図書館に結びつけられる側面も有していた。

第二に、当時の移動図書館の目的として、図書館設置の醸成や図書館網の構築などの図書館の振興のほかに、地域文化の振興や町村の自治振興の担い手の育成といった戦後復興に資する目的を移動図書館は有していたことである。確かに、巡回する地理的な限界性や図書館員の過度な負担によって、時間の経過とともに総じて前者の図書館網の構築へ移動図書館の目的が収斂される傾向にあったが、戦後初期に成立した移動図書館の目的や活動方法には、図書を媒介にしながらかつ図書館と地域とをつなぐことによって町村の読書環境や図書館の整備を促すとともに、地域に文化の種をまき人間形成に資するという当時の図書館長の思想が内在していたことが明らかになった。なお、戦後復興や図書館と地域とのつながりに対する図書館の理念や館長の思想が明確ではなかった場合、移動図書館の目的も十分に焦点化されない傾向にあった。

第三に、各図書館の歴史や地域の実情により、多様な活動方法による移動図書館が戦後初期に成立したことである。外来の活動を追随した移動図書館ではなく、個々の図書館によって内発的に創出された移動図書館は、地域とつながる戦後の新しい図書館像を実現するための手段として図書館の能動性を体現していた。いずれの移動図書館においても、まずは巡回先の地域において眼前の住民や団体に直接向きあう活動そのものに注力する特徴を有していた。移動図書館が個々の地域を直接訪問することによって、住民は図書を自ら選択でき、映画会や演芸会などさまざまな文化活動にも直接参加できる機会がつけられた。その意味において戦後初期に成立した移動図書館とは、戦前的系譜を継承しながらも、自律的に移動可能な自動車という手段による非施設としての事業・活動を通して、住民が集う場を地域に生み出し、ここを起点に地域社会への参加を誘引する装置であった。

5. 本研究の成果と意義

本研究の成果は次の3点に整理できる。第一に、戦後初期における日本の移動図書館の成立過程について、行政文書をはじめとする一次資料に基づきながら史的事実を明らかにしたことがある。戦後日本の移動図書館史研究については経験的な記述に留まる傾向にあり、移動図書館成立の評価も十分に定まっていなかった。本研究によって「ひかり号」が現在の移動図書館の創始として日本図書館史に位置づけることができた。

第二に、いずれの図書館においても戦前からの巡回文庫・貸出文庫の延長線上に移動図書館が位置していたこと、加えて自動車という移動手段と合流することで、図書館が地域への持続的な拡張可能性を明らかにしたことである。従来の研究は、中央図書館制度に基づく教化事業との関わりから戦前に限定して巡回文庫・貸出文庫が分析される傾向にあったほか、戦後成立した公民館を中心とする施設の系譜を戦前からさかのぼって検討している研究が多く、図書館史研究・

社会教育史研究において戦前・戦後の連続性の検討から移動図書館は等閑視されていた。本研究によって、移動図書館が地域組織や多彩な文化行事と結びつくことで、郷土振興や地域社会の再編成という戦前的系譜を内包していた側面も提示することができた。

第三に、各地の図書館が地域の実情や図書館の歴史的な積み重ねを踏まえ、戦後復興を目指す図書館の理念を移動図書館という実践によって実体化したことである。アメリカ文化のプロパガンダ装置として CIE によるメディア戦略の影響や、「ひかり号」という先導的な活動方法の模倣によって受動的に移動図書館が成立したのではなく、地域の振興や人間形成に資するという当時の図書館長の戦後復興に対する思想が移動図書館の成立と展開に影響をもたらすことを明らかにした。

こうした研究成果を踏まえ、本研究の意義は以下の点である。

第一に、現在各地で巡回している移動図書館に対して、図書館が「移動」する活動として再考を促す現代的意義を有していることである。本研究の成果から、現在のように定型的・固定的な手段に留まることなく、図書館への平等なアクセスを保障するという使命を直視し、各図書館の理念やサービス計画、地域の事情等を踏まえながら、能動的に展開可能な移動図書館を活かすための視点を提出することができたことである。

第二に、これまでに歴史的に十分検討されていなかった戦後日本の移動図書館の成立と展開に対して、戦前と戦後との連続性を視野に入れながら、独自で多様な移動図書館を実証的に明らかにした点である。確かに本研究においては移動図書館を受容した巡回先の地域や住民の視点から検討すべき課題が残されているが、本研究を通して、戦後復興を背景とした図書館長の思想も含め、地域とつながる図書館の理念が移動図書館にいかに関与しているのかが、戦後の移動図書館の成立と展開において重要な位置を占めていたことを歴史的に描出することができた。このことは、独自の図書館の理念を図書館活動によって実体化するという図書館の主体性に着目して、戦後日本の公共図書館史を考察する意義を示すことができたといえる。

第三に、青年教育や多彩な文化行事などと結びつき、地域文化の振興や町村の自治振興に資する移動図書館の目的や性格を見出すことができたことである。このことは、社会教育と図書館との二元論的な捉え方を再考する糸口を提示できたといえる。地域へ移動し住民と直接向きあう移動図書館の歴史から戦後の社会教育と図書館を捉え直すことによって、社会教育における図書館の位置づけの再検討に寄与できると考える。

本研究では、1940年代後半から1950年代にかけて成立した移動図書館を検討したが、残された課題も多い。最後に今後の研究課題と研究の展望を以下の通り整理した。

- ①「環境醸成」(社会教育法第3条)の主要な方法として社会教育施設の設置が行政の任務(施設主義)とされたが、非施設である移動図書館の拡大によって施設主義に対するいかなる問いかけが存在したのかを探究することである。
- ②行政機関によって立案された移動図書館の成立ではなく、地域住民の要望・運動に基づく地域内発的な移動図書館の成立と、同様の文脈で設置された営造物としての図書館との比較検

討である。

③高度経済成長を背景に 1970 年代初頭に安定した構造をもった「戦後公共図書館」(山口, 2002)において, 市立図書館による移動図書館の位置づけを検討することである。

④「モビリティ・マネジメント」の知見も視野に入れ, 現在の移動図書館の巡回ルートや活動方法に対し, 地域住民とともに考え学びあうプロセスを実践的に検討することである。

【資料1】 本論文の構成

序章 戦後日本移動図書館史研究の意義と課題

- 第1節 日本の移動図書館の現状と課題 – 本研究の背景 –
- 第2節 本研究の目的と課題
- 第3節 先行研究の検討と本研究の視角
- 第4節 戦後日本の移動図書館の時期区分 – 1970年代までを中心に –
- 第5節 本研究の方法
- 第6節 本研究の構成と概要

第1章 移動図書館をめぐる活動名称の成立過程

- 第1節 本章の課題と活動名称への着目
- 第2節 図書館統計における移動図書館の定義
- 第3節 辞典・用語集における移動図書館の定義
- 第4節 各種文献にみる移動図書館
- 第5節 1940年代後半に成立した移動図書館
- 第6節 貸出文庫の延長としての移動図書館

第2章 戦後日本における移動図書館成立の検証

– 高知県立図書館「自動車文庫」の成立 –

- 第1節 本章の目的と背景
- 第2節 戦前・戦中期における巡回文庫
- 第3節 「自動車文庫」の成立
- 第4節 「自動車文庫」の存続に向けた活動
- 第5節 「青年のための自動車文庫」への展開

第3章 独自の巡回方法による移動図書館の成立と展開

– 徳島県憲法記念館「文化バス」の活動 –

- 第1節 本章の目的と背景
- 第2節 戦前・戦中期における巡回文庫
- 第3節 徳島県憲法記念館の設置
- 第4節 「文化バス」の成立と展開
- 第5節 憲法記念館の理念を運ぶ「文化バス」

第4章 図書館機能と公民館機能を内包した移動公民館

– 富山県と兵庫県的事例から –

- 第1節 本章の目的と背景
- 第2節 戦後成立した移動公民館
- 第3節 図書館網の構築として成立した移動公民館 – 富山県的事例から –
- 第4節 図書館の分館的性格を有した移動公民館 – 兵庫県的事例から –
- 第5節 多様な機能を担い続けた移動公民館

第5章 工業都市における移動図書館の成立と展開

－八幡市立図書館と八幡製鉄所図書館の「自動車文庫」－

第1節 本章の研究視角

第2節 八幡市の戦後復興

第3節 八幡市における図書館と移動図書館

第4節 八幡市における児童文化運動

第5節 八幡市における移動図書館の性格

終章 本研究のまとめと今後の課題

第1節 本論文の要約

第2節 移動図書館が成立した土壌 －戦前と戦後の連続性－

第3節 移動図書館の目的と活動内容 －図書館理念の体現－

第4節 移動図書館の性格 －独自の活動方法への着目－

第5節 本研究の成果と意義

第6節 今後の研究課題と展望

【資料2】主要資料(章番号順)

第1章

- ・岩手県教育委員会『岩手県教育年報』.
- ・岩手県立図書館『岩手県立図書館館報』,『いわて』.
- ・鹿児島県立図書館『鹿児島県立図書館報』,『鹿児島県立図書館要覧』,『南の窓』.

第2章

- ・高知県『高知県歳入歳出決算報告書』.
- ・高知県議会『高知県議会定例会議事速記録』.
- ・高知県教育委員会『教育月報』,『教育年報』,『高知県教育委員会月報』.
- ・高知県立図書館『高知県立図書館一覧』,『高知県立図書館報』.
- ・高知新聞社『高知新聞』.

第3章

- ・徳島県教育委員会『徳島県教育調査書』.
- ・徳島県議会『徳島県議会定例会議事録』.
- ・徳島県立光慶図書館『徳島県立光慶図書館年報』.
- ・徳島県立図書館『徳島文化』.
- ・徳島新聞社『徳島新聞』.
- ・(徳島県文書館所蔵資料)『昭和三十二年図書館経営参考書類』,『昭和三十五年度図書館経営』,『憲法記念館再建に関する綴』,『昭和三十五年度文化バス庶務の綴』,『昭和三十五年度図書館日誌』.

第4章

- ・北日本新聞社『北日本新聞』.
- ・富山県立図書館『富山県中央図書館報』,『翼賛富山』,『富山県立図書館要覧』.
- ・富山県議会『富山県議会議事速記録』.

- ・富山県教育委員会『富山県社会教育月報』、『富山県教育委員会月報』、『教育広報』。
- ・富山県図書館協会『富山県図書館協会会報』。
- ・神戸新聞社『神戸新聞』。
- ・兵庫県議会『兵庫県会速記録』
- ・兵庫県教育委員会『兵庫教育』。
- ・兵庫県巡回文庫『兵庫県巡回文庫報』。
- ・兵庫県図書館協会『兵庫県図書館協会報』。

第5章

- ・八幡市『八幡市公報』、『市政通信やはた』、『市勢要覧』。
- ・八幡市議会『速記録』。
- ・八幡市教育委員会『八幡市教育要覧』。
- ・八幡市立図書館『としよかん：八幡市立図書館報』、『八幡市立図書館要覧』。
- ・(北九州市文書館所蔵資料)『予算要求書綴』、『会議録事績』、『市議会議案』、『昭和二十七年八月社会教育研究集会資料』。
- ・八幡製鉄所『くろがね』、『日鉄社史編集資料』、『所報』、『工場労働統計』。
- ・八幡製鉄所図書館『ともしび』。
- ・八幡製鉄所童話研究会『童研』。

【資料3】主要参考文献

- ・阿部彰「『ナトコ』による啓蒙政策の展開」『戦後地方教育制度成立過程の研究』風間書房，1983，p.685-742。
- ・石井敦『日本近代公共図書館史の研究』日本図書館協会，1972。
- ・碓井正久「第1章 社会教育の概念」『社会教育』長田新監修，御茶の水書房，1961，p.3-53。（教育学テキスト講座，14）
- ・裏田武夫，小川剛編『図書館法成立史資料』日本図書館協会，1968。
- ・小川利夫，倉内史郎編『社会教育講義』明治図書，1964。
- ・北河賢三『戦後の再出発：文化運動・青年団・戦争未亡人』青木書店，2000。
- ・小林文人編『公民館・図書館・博物館』亜紀書房，1977（講座現代社会教育，VI）
- ・小林文人「社会教育法の地域定着：法理念の定着の問題を中心にして」『社会教育法の成立と展開』吉田昇編，東洋館出版社，1971，p.119-137。（日本の社会教育，15）
- ・小林文人「社会教育法制と図書館法」『図書館法研究：図書館法制定30周年記念図書館法研究シンポジウム記録』日本図書館協会，1980，p.71-102。
- ・小林文人「戦後社会教育の地域的形成過程：とくに沖縄社会教育史研究に関連して」『地方社会教育史の研究』津田正文編，東洋館出版社，1981，p.20-43。（日本の社会教育，25）
- ・末本誠，上野景三「戦前における公民館構想の系譜」『公民館史資料集成』横山宏，小林文人編著，エイデル研究所，1986，pp.719-769。
- ・鈴木四郎，石井敦編『ブック・モバイルと貸出文庫』日本図書館協会，1967。（シリーズ・図書館員の仕事，15）
- ・鶴見和子，川田侃編『内発的発展論』東京大学出版会，1989。
- ・寺中作雄『社会教育法解説・公民館の建設』国土社，1995（現代教育101選，55）
- ・永末十四雄「市立図書館の主体形成：戦後期公共図書館における高知市民図書館の意義」『図書

- 館界』42(6), 1991.3, p.320-334. ; 43(1), 1991.5, pp.24-37.
- ・中山愛理『図書館を届ける : アメリカ公共図書館における館外サービス発展』学芸図書, 2011.
 - ・西崎恵『図書館法』羽田書店, 1950.
 - ・日本図書館研究会オーラルヒストリー研究グループ編著『文化の朝は移動図書館ひかりから : 千葉県立中央図書館ひかり号研究』日本図書館研究会, 2017.
 - ・萩原幸子「都道府県立図書館における移動図書館の変遷」『人文科学年報』30, 2000, p.113-117.
 - ・前川恒雄『移動図書館ひまわり号』筑摩書房, 1988.
 - ・松田武雄『近代日本社会教育の成立』九州大学出版会, 2004.
 - ・三井為友「社会教育の施設」『社会教育』長田新監修, 御茶の水書房, 1961, p.155-256.(教育学テキスト講座, 14)
 - ・葉袋秀樹「8.6 移動図書館」『新・図書館学ハンドブック』岩猿敏生ほか共編, 雄山閣, 1984, pp.296-298.
 - ・葉袋秀樹「戦後県立図書館論の系譜(I) : 1945-1969」『図書館評論』25, 1984.7, p.59-68.
 - ・源信重「県立図書館における移動図書館」『図書館雑誌』64(1), 1970.1, pp.15-18.
 - ・山口源治郎「解説 : 『戦後公共図書館』の形成と展開」『日本現代教育基本文献叢書 社会・生涯教育文献集 VI』日本図書センター, 2002, pp.5-15.
 - ・渡辺靖『アメリカン・センター: アメリカの国際文化戦略』岩波書店, 2008.
 - ・L.R.マッコルビン著 ; 斎藤毅訳『現代の図書館 : 図書館協力計画への手引き』河出書房, 1953.
 - ・M.フェザーストンほか編著, 近藤高明訳『自動車と移動の社会学 : オートモビリティーズ』法政大学出版局, 2010.

【資料4】各章の参考論文

各章については, 以下の拙稿に基づいているが, いずれも大幅な加筆・修正を行っている。いずれも単著である。

序論

- ・(記事)「移動図書館の定義と台数からみえる課題」『図書館車の窓』(株式会社林田製作所) 94, 2013.8, pp.5-6.
- ・(記事)「移動図書館の再発見」『図書館雑誌』(日本図書館協会) 109(7), 2015.7, pp.426-428.
- ・(記事)「地域の伴走者としての移動図書館へ」『みんなの図書館』(図書館問題研究会) 510, 2019.10, pp.2-10.

第1章

- ・(論文・査読あり)「移動図書館成立の序論的考察: 1940年代後半から1950年代前半における活動名称を中心に」『筑波大学教育学系論集』(筑波大学人間系教育学域) 44(1), 2019.10, pp.91-102.
- ・(研究ノート・査読あり)「埼玉県における移動図書館実態調査の予備的考察」『十文字学園女子大学紀要』(十文字学園女子大学) 48(1), 2018.3, pp.187-201.の一部

第2章

- ・(論文・査読あり)「高知県立図書館における自動車文庫の成立」『図書館界』(日本図書館研究会) 70(5), 2019.1, pp.572-584.

第3章

- ・(論文・査読あり)「徳島県憲法記念館の理念を運ぶ「文化バス」の活動: 1950年代前半を中心に」

『社会教育学研究』(日本社会教育学会)52(2), 2016.9, pp.1-11.

第4章

- ・(研究ノート・査読あり)「戦後移動公民館の成立と展開:富山県と兵庫県を中心に」『図書館文化史研究』(日本図書館文化史研究会)36, 2019.9, pp.127-160.

第5章

- ・(論文・査読あり)「戦後八幡市における移動図書館の成立:八幡市立図書館と八幡製鉄所図書館を中心に」『図書館界』(日本図書館研究会)73(3), 2021.9, pp.172-186.

【資料5】 研究助成一覧

- ・第1章, 第2章, 第3章

JSPS 科研費 JP25870685

「地域と図書館を結んだ戦後移動図書館の理念と成立に関する実証的研究」(研究代表者:石川敬史)2013年4月 - 2016年3月

- ・第4章, 第5章

JSPS 科研費 JP17K04640

「地域と伴走して教育文化運動へつないだ戦後移動図書館活動の実証的研究」(研究代表者:石川敬史)2017年4月 - 2020年3月